

# Viva Kango

Campus News of the Japanese Red Cross Hokkaido College of Nursing



日本赤十字社  
Japanese Red Cross Society

日本赤十字北海道看護大学

## 開学十周年記念行事開催

本校は平成十一年四月に開学以来、本年で十周年を迎えました。これを記念して、六月二十九日午後三時より記念式典、引き続き記念講演会、記念祝賀会が開催されました。記念式典では石井トク学長より開学に至った経緯、開学から十年間の本学の歩みを振り返り、今後の発展のため、教職員一同、一層の努力を続ける旨の式辞が述べられました。次いで日本赤十字学園大塚義治理事長より、赤十字の理念をもとに引き続き地域、そして国際的に活躍する人材の育成に邁進されたいとのご挨拶を頂きました。また、ご来賓の小谷毎彦北見市長、伊藤義郎日本赤十字社北海道支部長、鮎田耕一北見工業大学学長より心温まるご祝辞を頂きました。また十周年を記念して作られた校歌が本学学生によって披露され、



続いてご支援ご協力頂いた個人、団体に大学から感謝状が贈呈されました。式典に続く記念講演では、日本赤十字看護大学学部長川嶋みどり先生の「看護の価値と可能性」と題する講演を頂き、参加者一同、深い感銘を受けました。記念祝賀会は午後六時よりホテル黒部で開催され、北見市議会沢合正行議長、日本赤十字九州国際看護大学喜多悦子学長、北見赤十字病院吉田茂夫院長、松木光子前学長（名誉学長）ほか、多くのご来賓、出席者よりご祝辞と開学以来の様々なエピソードが披露され、盛会裏に宴を終りました。

## 校歌制定について

開学十周年の記念事業の一環として、本学の校歌を制定しました。歌詞は広く全国に公募することとしてホームページや新聞上に応募要項を掲載し、合計二十八の作品が全国から寄せられました。学内で厳正に審議を重ね、大分市在住の羽田野正弘氏の作品が最優秀作品として選ばれました。なお、次点の優秀作品には渡辺政之氏、藤合未来氏の二点が選ばれました。作曲は日本童謡協会会長、湯浅昭先生に依頼し、平成二十一年六月二十八日の記念式典で披露されました。また式典出席者には校歌CDが配布されました。これから未永く愛唱されることを期待しております。

### 日本赤十字北海道看護大学校歌

心奪こめて ♩100-108♩  
心奪こめて ♩100-108♩

1 心奪こめて 心奪こめて  
2 心奪こめて 心奪こめて  
3 心奪こめて 心奪こめて

ほろろと 涙のうた  
あはれに 涙のうた  
あはれに 涙のうた

ほろろと 涙のうた  
あはれに 涙のうた  
あはれに 涙のうた

ほろろと 涙のうた  
あはれに 涙のうた  
あはれに 涙のうた

# 第十一回 大学祭

「天真爛漫YOU・楽しんでしゃいなよ!」

六月二十七(土)、二十八(日)の両日、右記テーマのもと大学祭が開催されました。今年のテーマには参加者全員に大学祭を飾らず無邪気に楽しんでもらいたいという気持ちと、大学創立十周年を祝し、「天」という字に十周年の「十」(tenth)が表現されています。初日の朝の雨を除き、開催期間中は天候に恵まれ活気の溢れる大学祭となりました(一、一一九名来場)。



恒例の「ヘルスチェック(二五二名来場)」、「看護の体験教室(一〇八名来場)」、コラボ企画「WADS×ぴあっ子によるエイズ・性感染症についての啓発活動」を通して日頃の学びの成果を披露し、「日本赤十字社海外援助金のためのチャリティーうちわ・オリジナルチョコの販売」、「チャリティーバザー」、



「献血」、「赤十字の展示・骨髄バンクへのドナー登録」を通して社会貢献を行いました。さらに、「よさこい」、「のど自慢」、「模擬店」などのイベントが例年通り学校祭を盛り上げてくれました。  
後夜祭、花火の打ち上げをもって今年の大学祭も無事終了しました。



# オープンキャンパス開催

恒例のオープンキャンパスは、本年は七月二十六日(日)と九月二十七日(日)に開催しました。高校三年生を中心に一・二年生や保護者、高校教諭を含めて延べ二五六名の参加者に恵まれました。

オープンキャンパスの主な内容は、大学教育および平成二十二年度入学試験に関するガイダンスと学内の施設見学、在校生や卒業生の体験談で構成されました。本年度は、在校生の体験談は第一回が三年生の村田里美さんと前野陽子さん、第二回が三年生の宍戸洋介君と矢島優子さん、卒業生の体験談については造田亮子助手が担当してくれました。ハンドベル演奏は、



第一回は音楽部と吹奏楽部が担当し、第二回は卒業生でもある教員一同が担当しました。アンケート調査では「在校生や卒業生の体験談がとてもためになった」、「もう少し見学と体験の時間が欲しい」などの感想が寄せられ、参加者の九六・五%から「満足した」という回答を得ました。設備の充実や美観もさることながら、在校生による質問への回答が高い満足度をもたらしたようです。  
参加者数は年々増加しており、喜ばしい限りです。来年度はさらに多くの参加者にご来学頂けるように鋭意取り組みたいと考えています。

## 実習を終えてー後輩の皆さんへー



四年生  
中嶋 誉

皆さま、実習に勉強にお疲れ様です。私は今年の八月で、約一年間に亘る看護実習を終えました。私は実習に向けての準備について書いていきたいと思えます。なぜなら、四年生となった今、改めて一年生からの授業の大切さを痛感しているからです。

先生の授業は実習をより充実させることができる、知識と経験が



四年生  
山本 梨奈

実習期間中は、記録や調べ物に追われ、睡眠時間を十分にとれなかつたりなど辛い体験もありましたが、患者さんの笑顔や「ありがとう」という言葉は自分の元気の源であり、毎朝患者さんの顔を思い出して病院に向かっていたことを思い出します。実習においては、その方の身体状態を常にアセスメントし、必要な援助を考えていくこと、また、看護計画の立案の際

たくさんつまった内容となっており、先生がぼつりと話す一言の中に、大変重要な意味が含まれています。実習中に講義のプリントを活用する際には、講義中の一言をメモした内容が非常に役立つと思います。プリントや教科書には載っていない、先生の経験に基づいた知識を学ぶことができる毎日の講義の場を、もつともつと大切にすればよかったと思います。四年生となり国家試験へ向けた講義を受けながら、その授業の素敵さに気付き、当時にうつつ伏せに眠っていた過去の自分がいたことを後悔しています。

四年生の後期は国家試験の勉強

には、コミュニケーションや観察の中から得た、日常生活習慣やその方の生きてきた過程などの情報を最大限に取り込み、個性に合わせたケアを考えることの重要性を学びました。これらのことは、講義で学んだ基本的なことなのですが、実習を通して、その重要性を再確認することができました。また、患者さんに実際に関わらせていただく中で、その方の訴えを傾聴することはもちろんですが、言葉にならないサインを仕草や表情から汲み取っていくことの重要性を学びました。はじめのころは、情報収集に夢中になってしまいがちでしたが、話しやすい、頼みや

や看護研究演習、就職活動を中心に学校生活を送っています。特に国家試験勉強では実習で学んだ知識や技術などをきつかけに学習することができず。受け持たせていただいた患者様を度々思い出していたことが深まることに対して、患者様に感謝の気持ちを抱き、また、患者様が私の中で今でも息づいていることに感動を覚えます。この大学生活を送る中で、友人や先生そして患者様とさまざまな出会いと学びの中で、私がたくさんの方を支えられて過ごしてくることができているのだと実感しています。

四年生の後期は国家試験の勉強

すい雰囲気や自分自身がつくることのできているか？自分の表情や振る舞いはどうか？など、自己を客観的に見直していくことが大切だと思えます。私自身、現在、国家試験にむけての勉強、卒業研究に奮闘中ですが、実習で見たこと・感じたこと・経験したことは、時間が経つても非常に印象に残っており、それが国家試験の学習の中に生かされることは多々あります。一所懸命頑張ったことは絶対に無駄にはならないことを信じ、学びの多い実習になることを応援しています。

## 保護者懇談会を開催

オホーツクブルーの秋空につつまれた今年十月十八日の日曜日、第三回保護者懇談会が本学にて、午後一時から開催されました。参加者の学年別内訳は、一年生が十一組(十五名)、二年生が七組(九名)、三年生が二組(二名)、四年生が七組(八名)の合計二十七組(三十四名)でした。ありがたいことに、中には3年連続参加の保護者の方もお見えになりました。

石井トク学長ならびに加藤勉後援会長のご挨拶で開会し、大西章恵学部長より本学看護教育の概要の説明がありました。続いて希望者は、学内の施設見学に参加。同時に本学食堂において個別懇談会が開催されました。個別懇談では、学長や学年担任および学生委員ブースを設定し、学生の成績や学生生活等について個別の相談に応じました。

参加者からのアンケート結果の大多数は、①開催時期は「ちょうど良い」、②施設見学は「満足した」、③個別懇談は「大変満足した」、④保護者懇談会で得られた情報量は「十分」、⑤保護者懇談会全般は「満足した」と大変好評でした。しかしご意見の中には、インフルエンザ対応や防犯対策の強化などの要望がありました。さらに大

めて行きたいと思えます。保護者懇談会の日に限らず、保護者の皆様からのお問い合わせには、随時対応させていただいておりますので、ぜひご一報をいただくと幸いです。



(学生委員長 河原田榮子)



## 全国から七百余名が参加

# 「日本看護学教育学会」本学にて開催

平成二十一年九月二十日、二十一日の二日間、本学において日本看護学教育学会第十九回学術集会在開催されました。当日はメインテーマ「未来を拓く看護学教育」のもと全国から七百余名の看護学教育関係者が参加し、本学の全館をあげて多彩な行事が繰り広げられました。参加者からは本学校舎や自然環境の素晴らしさ、そして学生ボランティアの対応の良さを賞賛する声が多数寄せられました。

日本看護学教育学会は学会員数三五〇〇名を超える看護分野におけるわが国有数の学会であり、毎年一回全国各地で学術集会を開催しています。北海道では二〇〇二年の札幌大会以来二度目の開催となりますが、人口十万人規模の都市での開催は学会にとっても初めての行事の実施は初めてという記念すべき大会となりました。

学術集会は、学会理事でもあり学術集会長でもある本学石井トク学長による会長講演「看護学教師の責務」看護職のさらなる役割拡大の挑戦」から始まりました。会期中は、教育講演二件、学芸総会特別講演、シンポジウム二件、交流集会十件、口演発表八十四件、示説（ポスター）発表百三十二件と多彩な行事が本学全館で展開されました。

学術集会の進行を支える開催スタッフは、本学教員四十六名、本学職員十四名、赤十字病院等からの応援者十五名、公募に応じて参加してくれた学生および院生ボラ

ンティア五十名を合わせて百二十五名という大規模なものとなりました。

参加者へのアンケートの結果では、学術集会全般にわたり好評でしたが、なかでも特別講演の内容、受付の対応、無料シャトルバスの運行は多数の方から「大変良い」との評価をいただきました。自由回答では秋の大型連休中の開催であったことから航空券や宿泊の予約が難しかったとの指摘が数多くありました。一方、スタッフとりわけ学生ボランティアの親切的対応と笑顔への感謝の言葉や本学の施設や自然環境の素晴らしさを賞賛する声が多数寄せられました。

約一年半にわたる開催の準備として当日の多くの運営スタッフの協力によって、本学における過去最大規模の行事は大きな成功を収めることができました。

（学術集会事務局長 中岡良司）



## 日本看護学教育学会市民公開講座

日本看護学教育学会第十九回学術集会在開催されたものと、二日間にわたり開催されました。学術集会に先立つ二〇〇九年九月十九日（土）十五時より、本学講堂において、大谷るみ子氏（福岡県大牟田市認知症ケア研究会代表）を講師とした市民公開講座が盛大に催されました。二五〇余名の参加者を得た会場は熱気と興奮に包まれました。

大谷るみ子氏は「人は皆、リュックサックを担いでいる。その中身がわからなければ、その人をサポートすることは出来ない。その中身を共有することから、看護は始まる。」また、大谷氏は続けて語る。「全てのことをやってあげることは決して親切ではありません。できることは本人にやってもらい、できないことのみ手伝うのです。」

回答し、肯定的な感想で占められていた。本学が学術講座の情報発信基地としての役割を期待されていることが窺える結果であった。本講座を実施するに当たりご尽力を賜りました皆様に厚くお礼申し上げます。

（市民公開講座担当 松村三千子）



講演終了後も興奮がさめやらぬ様子で聴衆からは、模擬患者演習で認知症ケアを体験したいとの要望が聞かれ、アンケートにおいても、九十七%が講演内容が良かったと



## 学生の海外研修

日本赤十字九州国際看護大学が主催する海外研修に本学からも学生が参加しました。

### 「インドコロン」

三年 寺田 真梨子

私は、今回初めてインドを訪れた。インドという一つの国であるが訪れる予定であるコルカタ、ベナレス、デリーはそれぞれ違う側面がある。と聞いていた。同じ国であるのに何が異なっているののだろうか。と疑問に感じていた。そこで、インドについて特に三都市の特色とその違いについて私が感じたことを記述していきたいと思う。

インドに最初に降り立った都市であるコルカタは、インド第二の都市であり、英国植民地時代には首都として栄えた町である。この都市について一言で言うと私は、「ひと」とであると感じた。その理由は三つある。一つ目は、至る所にたくさんの人々がいたことである。大きな路地は元より、小さな路地にさえ人で溢れかえっていた。二つ目に階級・人種共に非常にバラエティーに富むという点である。高級住宅地とスラムが混在していることや一流ホテルの軒下で生活を営む人々がいる事実を目の当たりにし、この差はどこに生まれてくるのだろうかと考えさせられた。三つ目の理由として人種・階級・宗教など様々な人々が近密に存在

している中で、それでもここに生きる人々の生命力の強さを感じた。そのため私はコルカタを表すならば「ひと」とであると思った。インド全体を通して、階級や宗教、貧富の差を感じる場面は多くあったがここコルカタでは殊に強いと思われる。近年、経済成長が目覚しく期待される分野が多くあると思われるが、一方で世界第二の人口を抱えるインドで国内情勢のコントロールを維持することは困難であることがコルカタという都市を通じて垣間見えた。

ベナレスでは早朝からガンジス河に沐浴に行く人々を見て、コルカタより人々がこの文化・宗教の中で生活していることが強く感じられた。ベナレス市街では女性の姿はあまり認められず、女性で外出しているのは学生ばかりであった。世界ではまだまだ女性の地位は低いと言われているがその事実を身を持って感じた。また、学生交流を通じてインド人の自己主張の強さに圧倒されるばかりであった。そのため世界で生きていくためには、自分の主張を明確にし、つかり相手に伝えられる能力が日本人にはもつと必要であると思った。デリーでは、ニューデリーとオールドデリーで異なり、ニューデリー

ではこれまでの都市とは大きく異なり整然とした町並みが印象的であり、インドの路上で初めてゴミ箱を見つけたのもこの町である。デリーではこれから、まだまだ栄えていこうという人々の躍動が感じられた。

今回の十日間の研修でインドのすべてがわかったわけではない。むしろ知らないことの方が多く自分の無知を感じる。それは、人として社会の礼儀や文化、言語の理解が不足しているということだけでなく、看護職者としての知識・技術・経験も不足しているということである。また社会的に不利益な立場にある人々を現実目の当たりにし、様々の事を考えさせられた研修となった。今後の自己の課題として、たくさんの事を経験し、学ぶことにより、無知を知に変え、新たな可能性につなげたいと思う。



### 「インド体験記」

三年 矢島 優子

私は今回、八月十八日〜八月二十八日の十日間、赤十字三大学合同で開かれたインドへの研修に参加した。

インドの人口の八十%近くが信仰するヒンズー教のカースト制度。最下層の人々は、貧しい人々の密集するスラム街で生活をし、職業にも就けず教育も受けられず、容易に下痢などの疾患でその命を落としてしまう。そして、そのような人々を生みだすカースト制度は解決がなされたと言張る上層階級の人々。町を歩けば裸足の子供や、脚を失った男性がお金や食べ物恵んでほしいと訴え私達に手を差し出してくる。インドではこのような人々の健康に、宗教だけでなく政治経済など様々な要因が複雑に絡み合い、深く根付いているため人々の健康を巡る様々な問題は容易に解決できるものではないことが分かった。しかし、実際に自身の五感を使って様々なことを体験し、それらの矛盾や葛藤を感じ



考え自分のものとして受け止めるという事は、今後の自分自身の在り方というもの築き上げる事に繋がり、またそれについて考えるという事も感染症を始めグローバルな健康問題に取り組まなければならぬ現在あるいは将来の看護を考えるにあたって重要な事であると感ずる。

私は今回の経験を生かし残りの大学生活で、看護職に就くという事は自分にとってどのような価値を見出しているのかという事を常々考え、この大学で看護師となるための知識・技術・態度を育てる土壌を耕していこうと思う。

また、今回の研修に参加するにあたり、両親をはじめ大学の先生方などたくさんの人に相談に乗ってもらい協力してもらえた事に心から感謝したいと思う。そして、今度は是非後輩にも、このような自分自身の貴重な糧となる経験をたくさん得て欲しいと願っている。



## 文科科学省「社会人学び直しニーズ対応教育推進プログラム」 地域格差のない医療情報提供のための薬剤師・看護師教育プログラム

『地域格差のない医療情報提供のための薬剤師・看護師教育プログラム』の開講式が六月二十日(土)、本学において挙行されました。

「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム」は、各大学、短期大学、高等専門学校における教育研究資源を活用し、社会人の学び直しニーズに対応した教育プログラムを展開する優れた取組を支援することを目的として、文科科学省が平成十九年度から開始した事業です。平成二十一年度に企画された本プログラムは、本学と

北海道医療大学との連携による取組として選定されました。

本プログラムは、現場に勤務する薬剤師・看護師を対象としています。臨床現場においては地域住民・当事者が治療における意思決定のため、疾患及び治療の理解を含めた医療情報リテラシーの向上が重要となつてきていますが、医療情報を提供する側、特に遠隔地の臨床現場で働く薬剤師・看護師は最新の医療情報取得や相談スキルを向上させる機会が少なく、地域住民への医療情報提供が十分と

いえる状況ではありません。本事業の目的は、地域格差のない医療情報を住民に提供するため、臨床現場で働く薬剤師・看護師が最新の情報を入手・提供できる能力の育成にあります。

札幌会場での対面受講、北見会場での対面受講に加え、遠隔地でも受講可能なe-learning (DVD) 受講によつて学習プログラムが進行し、基礎共通プログラムとして十二回、専門分野別プログラム(生活習慣病、感染症、メンタルヘルス、がん)として四回の計十六回によ

り構成されています。

平成二十二年度もさらに充実した内容のプログラムを実施する予定です。詳細についてはホームページにてご案内をいたします。卒業生をはじめ、看護師の皆様の受講をお待ちしております。



六月の開学十周年記念行事に始まり、日本看護学会の運営等々、この半年間は大きな行事が目白押しでした。四季の移ろいを感じるゆとりがないほど、今なお多忙を極めています。本学が着実に歴史を刻んでいる音は聴こえてきます。

Viva Kango 二十六号では、三、四年生の論考を多く掲載しました。瑞々しい感性と視座から、成長の軌跡がうかがえます。読者の皆様へも、何がしかのメッセージが伝わることを期待しております。

### 独立行政法人 科学技術振興機構 支援事業

## 平成二十一年度サイエンスパートナーシッププロジェクト

# 「命の源、心臓の働きを学ぶ」

平成二十一年八月十一、十二日の両日、「命の源、心臓の働きを学ぶ」と題した講座型学習活動が連携先である北見柏陽高等学校の三年生二十七名を対象に開催されました。本講座は科学技術振興機構が子供たちに科学への関心を高めてもらう支援事業である「サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト (SPP)」へ本学が申請し、採択され執り行われました。一日目は午前中の講義の後、ラットの解剖実習が行われました。高校生たちは初めての解剖で心臓の

動きや内臓器官について観察しました。生命の内部機構がダイナミックに活動していることを体感していました。二日目は午前中に講義と生体シミュレーターを用いた心電図の観察を行い、正常波形と異常波形について学びました。午後からは自らの身体を使って体位変換や運動時の心拍数、血圧の測定を行いました。その後、グループワークに入り、二日間の成果を六グループで発表しました。高校生たちは講座開始時の緊張した面持ちから最後の発表では輝い

た目へと移り変わっていました。発表の中にも「驚いた」、「びっくりした」などの表現が多く聞かれ、印象深い講座であったことが伺われました。今後はより多くの教職員が関わることにより、科学的思考を持った意欲ある医療人の育成に寄与するものと思われました。最後にティーチング・アシスタント (TA) として参加した本学学生、SPPへの申請、運営、講義実習に関わりました教職員の皆様、どうもお疲れ様でした。



日本赤十字北海道看護大学内誌  
**Viva Kango**  
 第26号  
 発行日 / 2009年11月30日  
 編集・発行 / 広報委員会  
 〒090-0011 北海道北見市曙町664-1  
 TEL (0157) 66-3311 FAX (0157) 61-3125  
 mail to : kouhou@rchokkaido-cn.ac.jp  
 http://www.rchokkaido-cn.ac.jp



編集後記